

あれから5年…歩き始めるアフガニスタン

水不足が難民を生む

—困窮の流れを断ち切るために—

生活や農業のためになくてはならない水。乾燥地帯に位置し、長く紛争に苦しめられてきたアフガニスタンの人びとにとっての水の重みは、日本の比ではありません。そして水が枯れてしまえば、人びとは村を出て国内避難民や難民となってしまいます。PWJは水不足に見舞われた人びとの支援や、井戸掘りなどを進めてきましたが、「水不足→難民の発生→緊急支援」が繰り返される流れを断ち切ることをめざして、PWJスタッフが水資源の調査・管理の仕事にチャレンジしています。

年間降水量はわずか250ミリ

人口の80%が農業に従事しているアフガニスタン。その北部、サリブル周辺の年間の降水量は約250ミリといわれています。日本なら、台風や集中豪雨で、1回に降ってしまうこともある量です。その源は、11月末ごろから4月末ごろまでの間に降る雪。この時期がアフガニスタンの雨期にあたり、乾期はまったく雨が降りません。雨期から乾期に変わること、「大雨」があって、ときには被害を出しますが、その雨量は、洪水が多発した2005年で一雨15ミリほどです。

数百万人が難民となり、その後、帰国が進まなかった大きな理由が水でした。そして今もなお、水の問題は、不安定な政治情勢、未整備な社会生活基盤（インフラ）とともに、復興が進まない要因になっています。しかし、降水量の少なさだけが問題ではありません。水に関するデータがなく、水資源の管理が行われていないことが、水と生活をめぐる問題をさらに深刻にしているのです。



積雪時の山岳域



増水した川



水に大きく左右される丘陵域

地形と水の使い方から、アフガニスタン北部のサリブル地域を、山岳域、丘陵域、かんがい域の3つの区分にわけて考えることができます。

山岳域は、標高1000メートルから、ときには2000～3500メートルにも達する急峻な土地で、地域の主要河川であ



バケツを手に水をくみに歩く住民

るサリブル川が源を発しています。かんがい域は、水源域の降水量に依存してはいるものの、1年中、流れが絶えないサリブル川などに沿って広がる平坦な地域。文字通り、かんがい用の水路もあり、小麦やとうもろこし、メロン、スイカなど、多様な農作物が栽培されています。

河川からの水を利用できるかんがい域よりもさらに対策が必要なのが丘陵域です。川は雨期だけ水が流れ、乾期になると枯れてしまいます。井戸や、岩盤をくり抜くなどしてつくった伝統的な貯水池「カンダ」に貯まった水が、生活用水や農業、家畜などの飲用に使われます。しかし乾期になると浅い井戸の多くは枯れてしまい、貯水池の水もほとんどなくなってしまいます。



伝統的な貯水池

戦乱で失われた水データ

「ふつうの国にある水や気象に関するデータ、水の利用計画がアフガニスタンにはほとんど存在しません。正確な降水量の統計さえないので」

自然界での水の循環を研究する水文学が専門のPWJスタッフ、児島淳は嘆きます。

「日本では、水をはじめとする気象に関するデータを観測するアメダスの観測点が平均17キロ四方ごとにあります。アフリカのシエラレオネのように内戦が続いた国にもデータは存在し、シベリアやタクラマカン砂漠でも調査が行われています」

アフガニスタンでも1964年ごろから78年ごろにかけては調査が実施されました。1979年にアフガニスタンに侵攻した旧ソ連はサリブルの地質調査を行ったといわれていますが、そのデータの行方は確認されていません。

水資源の量を把握して、実態に合った水の利用計画が立てられるべきです。かんがいに利用できる水の量を見定め、作付すべき作物の種類や量を決めていく。そして初めて、農業を中心とした安定した生活につながっていくのです。

水不足が生んだ避難民の
キャンプ(2001年)

★特集は裏面へ続きます。

データ求めて雪山や川の中まで

水に関するデータをまとめ、データに基づいて水を効果的に管理する社会づくりを進めたいと、児島らは2003年、各地に観測機器を設置し、各種のデータを収集する取り組みを始めました。

降水量をはじめ、気温、湿度、川の流量、地下水の量、地面からの水分の蒸発量などのデータを取り、地域での水の循環を具体的に解明します。

観測機器は、標高が3500メートルにもなる山中にも設置。畠地での水の消費量や蒸発量など（挙動）を測るため、高さ9メートルの観測タワーも建設しました。降雪・積雪期のデータを採取するため、雪の山中を歩いたり、胸の高さほど増水した川にロープを渡して入り、川の流れの速さを測ったりもしました。

2006年4月現在、観測点は計14カ所。日本のアメダスにはおよびませんが、サリブル州では約30キロごとに1つの観測点ができたことになります。



機器を肩に雪山を歩く



高さ9mの観測タワー



増水した川に入る児島

干ばつ被害の低減にも効果

観測とデータの蓄積を開始してまだ2年ですが、すでに成果も上がっています。

2004年の雨期、観測されたアフガニスタンの降雪量は極めて少ないのでした。PWJは「次の雨期が来る前に、貯水池や貯水槽の水が枯渇してしまう」と判断。生活用水や飲料水が枯れてしまったときに、間をあけずに緊急給水支援を実施できるよう、PWJは事前に資金や給水車の手配などを済ませ、水が不足し始めた8月、すぐに緊急給水を実施しました。

アフガニスタンの水・エネルギー省や地方開発省は「川や流域の水量に関するデータのそろっている川は、国内には1本もない。PWJスタッフの活動は貴重だ」と話し、その取り組みを高く評価しています。



緊急給水のための取水作業（2004年）



PWJの給水を見守る子どもたち

かつては「美しきアフガニスタン」…

PWJスタッフ 児島淳

アフガニスタンはかつて、その美しさから、「美しきアフガニスタン」と呼ばれていました。「40年前のサリブルは今よりも水に恵まれもっと豊かだった」とも聞きました。乾燥地帯にあるために、気候変動の影響も大きく受けていると思います。水の困難が少しでも低減され、人びとが農業を再開し、復興につながっていくよう、活動を続けていきたいと考えています。

アフガニスタン支援にご協力を

郵便振替をはじめ、銀行振込、インターネット上のクレジットカードによる寄付も可能です。PWJの支援活動に継続的にご参加いただける各種の会員制度、継続寄付の制度もございます。詳しくはホームページ、またはお電話0120-252-176（通話料無料）で。

<郵便振替>

口座番号：00160-3-179641

加入者名：ピースウィンズ・ジャパン

*アフガニスタン特定寄付の場合は、通信欄に「アフガニスタン」とお書きください。

<ホームページ>

<http://www.peace-winds.org/>

世界の支援地から

イラン

バムなどに待望の新校舎完成～イランでの活動を終了～

2003年12月のイラン南東部地震の発生以来、被災地バムなどで活動を続けてきたPWJは、バムとイランデガンで耐震性のある学校を建設。2月に完成式を行いました。また「耐震技術テキストブック」も完成。これら事業の完了により、PWJのイラン支援活動は終了しました。ご支援ありがとうございました。

インドネシア

アチェで種子・農機具など配布～インドネシアでの活動を終了～

2004年12月のスマトラ島沖地震発生後、スマトラ島北部アチェ州で支援活動を続けてきたPWJは、2006年1～2月、4000世帯に、稻・豆・野菜などの種子、肥料、農業機械などを提供しました。この事業の完了により、1997年からPWJが継続してきたインドネシア支援活動は終了しました。ご支援ありがとうございました。

パキスタン

山間部村落への帰還が始まる

PWJなどがパキスタン北部ムザファラバード近郊で運営している地震被災者のキャンプでは、3月中旬から、山間部村落への住民たちの帰還が始まりました。PWJなどがバスやトラックを手配して、帰還を支援しています。



© JADE／宮崎岳

国内災害部

東京都葛飾区と災害時の支援協定

PWJと東京都葛飾区は3月29日、首都圏直下型地震などの大規模災害を想定し、支援協定を締結しました。自治体との協定は、静岡県袋井市に続き2件目です。葛飾区はまた、緊急支援用大型テント「バルーンシェルター」を、自治体としては全国で初めて購入・配備しました。このニュースはNHK、日本経済新聞、東京MXテレビでも報道されました。

今月の
オススメ商品！

ピースウィンズ・ショップ

チャリティーCD

サウザンズ・オブ・スマイルズ／笑顔がいっぱい

「アフガンの子どもたちに美味しいものをごちそうする会」製作。フォークシンガーで代表の田代ともやさんの想いに、仲間のフォーク歌手たちも協賛してくれました。売上金の一部は、PWJに寄付され、アフガニスタンの大地に野菜や種を贈るための活動に使われます。



<http://www.peace-winds.org/shop/>